

熱帯の国ガーナでアグロフォレストリーと自立支援



農学部 2年
阿部 美里
ガーナ
2016年8月30日～
2016年9月22日

渡航概要と内容

30日

ガーナ大学で経済学を教えていらっしゃる方と一緒にご飯を食べ、私が参加している団体に関する話を聞いていただきアドバイス等をいただきました。

31日

アブリというところへ行き知り合いの農場を見学させていただきました。そこではキャッサバや、プランテン、パイナップルなどを育てていました。

1日

孤児院のオーナーと一緒に農地プロジェクトを進めるために必要な農具を買い、農業を始める段階まで立ち会うことはできませんでしたが、9月終わりには始めてくれるようオーナーと約束を取り付けました。

9月2日～10日

孤児院滞在。近所の羊やヤギが孤児院の裏庭に入り、裏庭で育てている作物を荒らしていたようなので、正面の門を勝手に閉まるようにしたり、裏の隙間をふさいだりしました。また、孤児院の近くに Forestry Commission という森林を管理する組織の支部があったので、そこも訪問しお話を伺いました。また、知り合いのつてをたどり、COCOA RESEARCH INSTITUTION という施設を訪問させていただきました。そこでは、カカオのアグロフォレストリーを行っていたり、カカオの木がかかる病気に関して研究していたり、カカオから様々な製品を作っていたりしました。

11日

ガーナの日本大使館で専門調査員として働いていらっしゃる方の家を訪問させていただいたり、ガーナで農園を営んでいる方やパン屋を経営していらっしゃる日本人の方々と一緒にご飯をいただいたりしながら、ガーナに関する様々な話を聞きました。

12日～14日

日本で集めた募金をもとにガーナで学校建設をしているところを訪問するためにインコランザという町を目指して移動。学校建設の現場を見学させていただいたり、日本から寄付された救急車なども見せてもらいました。



15日～21日

アグロフォレストリーを導入を相談するために北部へ移動。アグロフォレストリーの導入を検討してくださっているガーナ人の方と会い、どんな木を植えるのか、どれくらいの規模で始めるのかなどの相談を重ねました。また、北部にある Agricultural Ministry を訪問し、北部で行われているアグロフォレストリーについて話を伺いました。そして、昔からアグロフォレストリーをされているという農家さんの農地も見学させていただくこともできました。最終的に、マンゴーの木を50本、カシューナッツの木を50本、ファイドヘルビアを50本植えていただけることになりました。ファイドヘルビアという木はほかの木と違って、乾季に葉を展開し雨季に葉を落とすという特性を持ったガーナに自生している木で、私はこれが一番アグロフォレストリーに適するのではと思いこの木を植えてもらえるように交渉を重ねていました。けれど、なかなかこの木を知っている人がおらず種や苗を手に入れるところを見つけるのに大変苦労しました。それでもやっと知っている人を見つけ、乾季になったときに種を分けてもらえるように約束してもらいました。

また、青年海外協力隊やNGOとして北部で活動していらっしゃる方々と一緒に食事をしながら、特にガーナの北部に関するお話を聞くことができました。



渡航を通じて感じたこと

ガーナでNGOとして活動している方々からのお話を聞いたり、実際に自分が支援している孤児院を訪問したりして実感したことは、ガーナ国内に海外からの援助があふれているということでした。確かに、井戸が掘られたのもごく最近のことで数年前までは遠くの川まで水を汲みにいかなければならなかった状況の村もあったりして援助が必要ではないわけではありません。けれど、海外からの援助がたくさんあることで自分たちの力でなんとか国を発展させようという気持ちが起こりにくくなるのではないかと、発展途上国に対して支援しているという聞こえはいいけど本当にその国の人々のためになっているのか、自己満足になってないかなど様々なことを考えさせられました。

都市部では水道や電気、ガスなどのインフラは整っているほうでしたが、やはり一歩都市部から離れて小さな村に行くと水道や電気、ガスがなくても不思議ではなく特に道路は整備されているところのほうが少なかったです。10年後、20年後このような村にも水道や電気が使えように整備されたとして、果たして地球はそれほどの供給量に耐えられるのでしょうか。もはやそんなときには地球の資源は枯渇しているのではないだろうかと思ってしまいました。日本で電気がなくては生きていけない生活をしている私がこんなことを言うのはおかしいですけど、ガーナで電気が自由に使えない生活を体験したときに電気がない生活もいいのではないかと思いました。電気があるから夜遅くまで活動することを自然と強制されてしまう。電気がなければ日が落ちてしまえば寝るしかない。人間本来の生き方としては電気がないほうが正しいのではないのでしょうか。けれど、電気がある生活に慣れすぎてしまっている身としては不便さを感じてしまい、それを日常生活として受け入れることはできないなと感じてしまいました。

また、孤児院に滞在するなかでやはり一人ひとりの子供に対する愛情が不足しがちであることを痛感しました。孤児30人ほどに対して大人のスタッフは、ご飯を作る一人と子供たちの世話をする人が二人の計3人だけ。愛情を注いでくれる親がいることがどれほど貴重であるのかを痛感しました。富裕層がだんだん増えてきたガーナでは現在、政府が国内の里親制度を充実させようと国営の孤児院は縮小傾向にあるそうです。確かに、自分だけに愛情を注いでくれる人が一人でもいるということがとても大事なことだということは孤児院を訪問したときに実感しましたが、日本国内で実の親が子供を殺すというニュースがあふれている現状を目の当たりにしている私としては里親制度だけを奨励することはよくないのではないかと思いました。ただし、日本と大きく違う点はある程度余裕のある家庭ならば、ナニーさんが気軽に雇えるところですが、ナニーさんが雇えるならばまた違った問題が出てくる



のか、それともうまくいくのか。発展途上国には解決すべき問題がまだまだたくさんあるなと思ったのと同時に、日本にも多くの問題があり海外ばかりに目を向けているばかりではいけないなと思いました。

ガーナで森林や農業に関係する公的機関を訪問しお話を伺ったり、実際に農地を見学しその土地で農業を行っている人からもお話を伺う中でびっくりしたのが、国によってしっかりと森林管理がなされていることでした。森林を切り拓いて農地をつくる時、すべての木を切ってしまうように残す木の本数が土地の広さによって規制されているらしく、もしそれを守らなければペナルティが課せられるそうです。見学させてもらった農地でも実際に木を残していました。また、ガーナでは副業として農業をしている方もいらっしゃるって、それはあまり世話をしなくても育つ作物が多いからこそできることなのかなと思いました。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

この渡航を通じて実感したことは、海外からの援助があることで逆に現地の人々のやる気を失わせてしまうことの重大さでした。ガーナに行くきっかけとなった所属している団体の理念が“自立支援”というもので、これは現地の人々の力だけで最終的には経営してもらおうための支援をするということです。もちろん、団体に入ったきっかけの一つはこの考えに惹かれたことだったのでこの理念について理解していたつもりでしたが、実際にガーナを訪れてみてこの考え方がどんな意味をもっていたのかということにやっと気づかされました。ですから、今後より現地の人々が自分たちの力でやっという気を起こせるように団体の一員として活動していくつもりです。同時に、ガーナがどのような場所だったのか、海外からのどのような援助が行われていたのか、できるだけ多くの人に知ってもらい一人でも多くの人にガーナという国に興味を持ってもらえるように活動していきたいです。

また、今回森林や農業に携わる方々とお話することでいかに自分の知識や経験が浅いのか痛感し、自分の未熟さを思い知りました。そして、様々な施設や農地を訪問するなかで自分の勉強していきたいことが定まり、今後の進路選択にいい意味で大きく影響を及ぼすことができました。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *ビザ・予防接種
- *生活費・移動費 など

